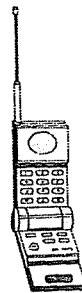


情報化社会の信仰と形態

島田裕巳



ラジオ男・昭和天皇・金屋人

ある日、飯田橋の駅から総武線の各駅停車に乗った私
が空いていた座席に腰かけると、目の前に「ラジオ男」
がいた。ラジオ男は、比較的大きめの携帯用ラジオのス
ピーカーに耳を押しつけながら、窓の外を見ていた。し
かも、彼はただぼんやりと外の景色を眺めていたわけで
はなかった。窓の外を通り過ぎていく光景を、逐一ラジ
オのスピーカーに向かって報告し続けていたのだ。付近
の座席に腰かけた乗客たちは、ラジオ男をわざと無視し

ているかのような表情を見せ、彼に関心を払わないよう
にしていた。

この男は、何のために窓外の光景をラジオに向かって
報告しているのだろうか。誰に向かって報告を続けてい
るのだろうか。普通なら持つはずのそういった疑問を、
ラジオ男は私たちに抱かせない。彼の頭脳は何らかの原
因によって損なわれているのだ。おそらく、彼は長い間
精神病院に入院していたことだろう。彼は、ラジオを通
して幻聴を聞いているだけなのだ。私たちは、そういつ
た結論を下し、それ以上ラジオ男の世界に関わろうとは

しない。

*

精神医学の中井久夫によれば、精神科医の扱う患者たちの「妄想世界」に、昭和天皇の死は大きく影響しているという。子供時代に父親から厳しい教育を受けた患者の中には、その父親をモデルにした「よい陛下」と「悪い陛下」が同居している。そして、悪い陛下は、彼に向かって父親を「殺せ」と命じ、「殺さないとおまえを殺す」と脅かす。ところが、その患者に一月七日以降、「その後どう？」と声をかけると、「陛下のお声が変わりました。陛下がもう仲直りしようとおっしゃる」と答えたという。

神話化された昭和天皇は、精神病患者の妄想世界に深く浸透している。天皇は、彼の頭の中に実在し、ペイトソンのいう「ダブル・バインド」の状況に彼を追い込む。妄想の世界の中で繰り広げられる「父殺し」をめぐる葛藤は、外側の世界で起こりつつある出来事を拡大して見せてくれる。だとするなら、一月七日を境に、私たちと天皇制との関係も大きく変わったことになる（幻のアレ

クサンドリアへ」『朝日ジャーナル』一九八九年四月七日号）。

*

山形市にある宗教教団「光命之会」は、天照大神を崇拜する小規模な教団だが、宇宙人との交信を行っていることで名高い。女性教主は、次男を出産したおりに、初めて金星人からの啓示を受け、それ以降、宇宙人とコンタクトを持つようになった。

教主は、夜間に、信者を引き連れて外に出向く。彼らは額の前で、両手を組み合わせて三角形を作り、金星からの使者である「テレベートさま」からの合図を待つ。しばらくすると、空には多数の光体が出現する。テレベートさまが現われたのだ。

この教団は、マスコミには人気がある。宇宙人との交信ということが現代を感じさせるのだろうか。あるいは、ステイブン・スピルバーグの作る映画、『未知との遭遇』や『E.T.』を連想させるのか。『11PM』や『なるほど・ザ・ワールド』でも取り上げられたことがある。

*

ここに選出された三つの事例は、情報化社会における

信仰について考えようとする私たちに、ヒントを与えてくれるように見える。信仰とは、本来特殊なコミュニケーションの回路を指す。信仰を持つ者たちは、その回路を通じて「何か」と交信している。ところが、現代では、その回路が次第に見えにくいものになってきている。注意して探し出さないと、うっかり見過ごしてしまう。さらに、それぞれの回路は個別化され、閉じているために、それが私たちの社会の中でどういった意味を持っているかを知ることが困難になってきている。

私たちは、おそらく情報化社会における信仰の難しさを述べることはできても、その可能性を具体的なものとして示すことはできないであろう。しかし、その事実を認識しない限り、私たちの抱える問題は明らかになってはこないはずだ。

目に見えない力

情報化社会がその幕を開けようとしていた時、そこではバラ色の未来が描かれていた。情報化社会が実現されれば、私たちは多様な情報を至る所から集めることが可

能になり、それを自由自在に活用して豊かな充実した生活を送れると宣伝された。確かに、今日では、私たちに与えられる情報の量は増え、情報が伝達される速度も飛躍的に上昇した。情報伝達のネットワークが確立されることで、地球上の至る所から間断なく情報が集まるといふ体制が現実のものとなっている。

その変化は激しく、私たちは、いつのまにか情報の嵐の只中に立たされている。情報の流れは、あまりにも巨大なものとなったために、私たちはそれをコントロールできない。私たちは、あふれる情報によってどこかへ押し流されていくのではないかという恐怖を抱いている。さらに、激しい勢いで流れ込んでくる情報によって、私たち自身の考えや行動が操作されているのではないかという懸念を拭い去ることができない。

私たちは、実はあの「ラジオ男」なのではないだろうか。どこから発信された電波によって操られていないという保証はない。私たちの発する声もどこに届いているかはわからない。私たちは本当に自分でものを考えているのだろうか。私たちの抱く欲望は、本当に私たちの

生理に根差しているのだろうか。自分の考えや欲望について突きつめていけば、それが本当に自分のものかどうか確信は揺らいでいく。

例えば、真夏の夜、テレビでナイターを見ていたとする。試合は白熱し、応援していたチームが逆転して七回の裏が終わる。攻守交代の間にはコマースシャルが流れ、テレビの中では有名なプロゴルファーがうまそうにビールを飲んでいいる。ビールのグラスを一気に空ける時の快感が蘇ってくる。そういうえば、冷蔵庫にはビールがまだ一本あったはずだ。こうして、一本のビールが消費される。

テレビは、消費への欲望を喚起する装置になっている。テレビの性格を考えれば、それは当たり前のことなのかもしれない。テレビ番組の製作費を出しているのはスポンサーの企業であり、視聴者はタダで番組を見ていることになる。民放では、コマースシャルが主であり、番組の方はコマースシャルを見せるための手段であるに過ぎない。ビールを飲ませるために、ナイターの中継がある。子供に菓子を買わせるために、子供番組が作られる。そ

の関係は決して逆ではない。テレビは、消費主義社会にとって欠かせない道具となっている。

私たちは、自分が楽しむためにテレビの番組を見ているはずだ。ところが実際には、私たちは番組に誘われてコマースシャルを見せられている。俗悪番組に対する批判があっても、そういった構造自体が問題として取り上げられることはない。それは、暗黙の了解、ふれてはいけないうる行為が心地よいものだからだろうか。私たちは消費という行為が心地よいものだからだろうか。私たちはテレビの与えてくれる情報の嵐に身をさらすことで、消費への欲望を刺激してもらうことを実は望んでいるように見える。

これはテレビだけではない。ラジオも新聞も、週刊誌も月刊誌も、吊り広告であふれた通勤電車も、すべてが消費の欲望を喚起する装置として機能している。そういったメディアを通して、目に見えない力が私たちを動かしている。

二十世紀の人文社会科学の発展は、まさに私たちを背後からつき動かす「目に見えない力」をとらえるための

試みであった。フロイトやユングの「無意識」、ゾシエールの「言語」、デュルケムの「宗教」、レヴィーストロースの「構造」、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」等、

それぞれの名称は違い、基礎となる学問分野は異なっているが、そういった概念がすべて目に見えない形で私たちを動かしている何ものかを指しているという点では共通している。

そういった思考の枠組の中では「私」という存在自体が極めて怪しいものとなってくる。実際、二十世紀の人文社会科学の歴史の最後に位置するフーコーの場合には、主体を権力の作用の結果として考える。「私」という存在は、この世界を客体として操作する主体の地位を迫られている。

私たちは、こういった力を発見することによって、「私」が「私」であることの根拠を見出しにくくなっている。

「私」が「私」であることの証明は困難に直面する。近代思想の幕を開けたデカルトは、「ワレ思ウ、故ニワレ在リ」という形で、コギトを発見した。デカルトはいかなる懐疑論によっても論破されることのない神の存在証

明を行なうために、「ワレ」を無前提に立言できる命題として立てた。

しかし、このコギトの発見は、田中仁彦も言うように「はかない真理」(「デカルトの旅/デカルトの夢」岩波書店)でしかなかった。「ワレ思ウ」ということ自体が疑われたとしたら、デカルトの枠組は崩壊する。私たちは、今や自分の思惟が自らのものであることさえ確信を持つて断言できない。それはすでにデカルトの哲学の中に予見されていたともいえる。デカルトは崩壊しつつあるキリスト教のコズモスの上に「意識(consentia)」と「良心(consentia)」にもとづく真理の世界を打ち立てようとしたわけだが、私たちがコギトを見失う時、デカルトの世界はカオスへと転じていかざるをえない。

情報とスクランダル

情報の送り手であり、受け手である「私」という存在の自律性が怪しげなものとなってくるとともに、情報化社会の危険性が明らかにってきている。

私たちは、各種のメディアを通して、自分に必要な情

報を収集しているのだと考えている。衛星放送によって世界のニュースがリアルタイムで入ってくれば、それで情報へアクセスする能力が拡大されたと考える。しかし、メディアは、情報を伝達する過程で、それを加工している。テレビに映ったニュースでさえ、出来事をそのまま撮影したものでない場合がある。選挙事務所で幾度「当選万歳！」が繰り返されることであろうか。同じ場面がアングルをかえて何度も撮影される場合もある。それをどこまで「やらせ」というかは難しい。また、様々な事件が同じテレビの画面に収められることで、均一な情報として整理されていく。天安門広場の動乱も、皇居のお濠のカルガモも、同じ大きさに切り取られて、テレビ画面に映される。私たちは対象との距離をうまくつかむことができない。さらに、絵になりやすい事件を、絵にないにくい事件よりも重大なものに取り違えてしまう。ミャンマー(旧ビルマ)での出来事が、フィリピンでの出来事よりもリアルなものとして迫ってこないのは、テレビがミャンマーの状況を映し出さないからではないだろうか。

私たちは、各種のメディアを通して伝えられる大量の情報の真偽を一つ一つ確かめることができない。どの情報を正しいものとして信じていいのか、容易には判断を下せない。そして、時にはマスメディアの伝える情報の信憑性を疑わせる事件さえ起こる。欲望を喚起する装置としてのメディア。そして、加工された情報。さらに、情報それ自体の性格に関わる問題がある。

情報化社会においては、確かに情報自体に価値がある。しかし、情報は貨幣とは異なっている。情報は、ただそれを所有しているだけでは、価値を生まない。貨幣なら、それを貯めることに意味がある。ところが、情報はいくら貯め込んでも仕方がない。人の知らないことを知っていることに価値はあるが、それは自分が人の知らないことを知っているという事実が明らかにされなければ、意味をなさない。

自分だけが知っている情報を明らかにすることは、スキャンダルを暴露することに通じている。スキャンダルとは、本人しか知らない秘密(情報)を他人が入手し、それを公けにするということである。スキャンダルが暴露

されることで、情報が公開されてしまえば、当の情報はすでに貴重なものではなくなっているが、暴露の行為自体には大きな意味がある。スキャンダルを暴露すること、多くの見返りを期待できる。その意味で、情報化社会とは要するにスキャンダラスな社会なのだ。

スキャンダラスな情報化社会において、秘密は常には暴露される運命にある。秘密のあるところに、マスメディアは、禿鷹のように集まってくる。それが貴重な情報であるとわかれば、たちまちのうちに徹底して調べあげられていく。そういった社会の中で秘密を持ち続けることは難しい。

秘密を保持するためには、徹底した防衛策が必要となる。特に、外側からは特別な秘密を保持しているかのように見える宗教の世界は、スキャンダルの格好の標的になりやすい。アメリカでその勢力を飛躍的に拡大し、保守的な社会層を取り込むことで政治の分野にも影響力を与えるようになった、いわゆる「テレビ教会」の説教師であるテレヴァンジェリストにまつわるスキャンダルが最近続いた。

テレビ教会は、テレビや衛星放送、CATVや電話といったいかにも情報化社会にふさわしい道具を巧みに利用した点で、新しい宗教の形態として見られがちだが、実際はかつて広大なアメリカ大陸をテントを持って巡回した幕屋伝道の伝統を受け継ぐものだった。幕屋伝道に携わった説教師たちは、信仰の覚醒を目的とし、各地で集会を開いてキリストの教えを説いた。そして、時には奇跡的な信仰治療を行い、信者たちから多大な献金を集めていった。

消費への欲望を喚起するテレビというメディアは、確かにそういった形態で布教を行うためには最適な手段なのかもしれない。テレビ教会の説教師たちは、テレビの画面を通して信者たちに献金を呼びかけた。献金は、究極の消費行動である。献金は信仰の証であり、あくまで無償の行為であるとされる。献金によって何かの見返りを期待することは本来の姿ではなく、あくまで神の恵みに対する感謝を形にしたものである点が強調される。テレビ教会は、献金という究極の消費行動にまつわる喜びを喚起したことになる。

ところが、献金を集めることに絶大な威力を発揮したテレビという道具も、一旦そこにスキャンダル要素がからんでくると、逆にテレビ教会の説教師たちの首を締める結果となった。テレビ教会の財政や説教師の女性関係にまつわるスキャンダルが発覚すると、マスメディアはその話題に飛びつき、たちまちにして情報は全国に伝えられた。テレビ教会をうさんくさいと考えていたインテリ層や、テレビ教会の保守的な政治思想を嫌悪していたリベラル派は、スキャンダルに乗じて、テレビ教会を批判した。スキャンダルは、テレビを媒介することで、信者ばかりでなく、一般の人間たちをも巻き込んでいったことになる。

テレビを通してスキャンダルを否定することは難しい。テレビは、幻想をふりまくこと(消費の欲望の喚起)や、幻想を打ち破ること(スキャンダル)には向いていても、論理的に説得していく手段としてはあまり有効ではない。テレビは知的な伝達手段ではなく、むしろ情緒的な情報伝達の回路である。テレビによってスキャンダルを打ち消すことができない以上、テレビ教会では信者たち

の情緒に訴えかけるしかなかった。女性問題を暴露されたあるテレビ教会の説教師は、番組の中でスキャンダルを事実として認め、自分の罪を信者たちに涙ながらに懺悔したという。

情報化社会では、入れ代わり立ち代わりスターが生み出される。しかし、逆にスキャンダルが暴かれることで、スターはその地位から失墜していく。情報の伝達される速度が速くなり、テレビの画面に映しだされることが多くなった分だけ、変化は激しい。そういった状況の中では、ある対象を、ある事柄を信じ続けること自体が難しくなってきた。情報化社会の中で、あらゆる情報はその正体を暴露される危険性に絶えずさらされている。

真理の相対化

情報の伝達が世界的な規模で行われることによって、私たちが自らの生活の前提として信じてきたことが、実は相対的なものにしか過ぎないこともわかってきた。私たちの常識は決して普遍的なものではない。その信仰の普遍性を主張し、ある国において国教に近い地位にある

宗教であっても、世界全体から見れば、間違いなく少数派となる。少数派のかかげる真理は、万人が受け入れる絶対的なものとは成りえない。もし、自らの宗教にこそ唯一絶対の真理があると主張するならば、それは他の宗教を否定することにつながる。特定の宗教の真理を絶対的なものとして、他の宗教の信者にまでその考えを押し通すことが、国際世論によっていかに糾弾されるかの実例が、『悪魔の詩』をめぐるイランとイギリスとの対立である。

両者の主張はそれぞれ自分たちの宗教や文化の枠内では正当化されるのかもしれないが、相手には受け入れられない。アッラーの神は、イスラム教徒にとっては唯一絶対の神であるが、西欧世界の人間たちにとっては悪魔にさえ見えてくる。

ところが現在、宗教に求められていることは、排外主義ではなく、他宗教との平和的な共存である。だからこそ、宗教協力の意義が強調され、その実践的な試みが行われてきている。各宗教が、世界平和という共通の目標をかけた、その実現とともに祈ることによって、安定し

た世界秩序の実現と、社会福祉の充実に寄与することが期待されている。ところが、宗教協力の運動は、宗教の基盤を脅かす危険を秘めている。それぞれの宗教がかかげる真理は異なっており、他の真理と両立しがたい部分を少なからず持っている。宗教協力の実践の中で、対立を棚上げにし、異なる信仰を尊重する姿勢を示すことで、結果的に自分たちの否定する他宗教の真理を認め、それによって自分たちの信仰を相対化していくことにつながる。そこには、現代の宗教がかかえる最大のジレンマがあるように思われる。

情報化社会は、あらゆる宗教的な真理を相対化し、スキャンダルの暴露によって信じるという行為自体を難しくものとしていく。永遠の真理として信じるに値するものがありうるのか。今、私たちはそういった疑問を持たざるをえない。宗教は、予定調和の世界をその前提としてきた。すべての人間を救済する世界が実際に存在することを説き続けてきた。しかし、情報化社会の到来は、すべての人間の救われる世界が果たしてありうるのかという懐疑を生み、救済の存在自体を否定しようとしている。

る。「私」の崩壊とともに、「世界」の崩壊が進行しているのだ。

不幸の拡散

これまでは、宗教への契機として、貧、病、争の問題が指摘されてきた。宗教は、貧、病、争に意味を与えることによって、不幸を救済への契機としてとらえなおそうとしてきた。そこには、神義論的な発想がある。なぜ自分だけが、不幸に見舞われなければならないのかという問いに答えを与えることから、宗教は出発している。不幸を神からの試練として受けとめ、宗教の教えにしたがうことを選択することによって、不幸から救済される手立てが示される。

情報化社会は、この世界に存在する不幸の数々を教え、それを全世界にすばやく伝達する。そして、人が不幸なままであることを放置しない。不幸な境遇にいる人間についての情報を提供することは、その不幸の解決を訴えることに通じる。それによって、不幸の意味が語られる前に、不幸は不幸であることを止めなければならなくなる。

る。

また、情報として伝えられる不幸は、私たちの個別の不幸を相対化する。アフリカの飢餓状態に比較するなら、飽食日本は不幸ではありえない。政治的な弾圧が日常化した国に比べれば、日本はあまりにも自由である。情報として伝えられる以上の不幸を、私たちは持つことが難しい。

しかし、自分以上に不幸な境遇にある人間の存在を知ることによって、私たちの不幸が癒されるわけではない。ただそれが不幸として表出されることを阻まれるだけだ。こうして不幸は次第に拡散していく。確かに私たちは、この地球が深刻な危機に陥っているという情報を与えられ、今の生活が突如として不幸に陥っていく可能性のあることを理解している。

核戦争が起これば、あるいは原子力発電所が事故を起こせば、多くの人間が死に、地球全体が崩壊の危機に直面することを知っている。あるいは、消費主義の拡大が、環境破壊につながることを知っている。しかし、私たちはそういった問題を、日常の中で深刻に受け止めて

ばかりはいられない。問題はあまりに多く、またそれぞれが複雑にからみあっているために、どこから手をつけたりいいのかわからない。今、手を打たなければ取り返しのつかないことになるのではという恐れを持ちながら、現実には自分たちの無力さを思い知らされ、焦燥感だけがつのる。

深刻な危機についての情報がメディアからあふれ出てくるにも関わらず、そういった危機をもたらし原因となった悪をとらえることが難しくなっている。世界の現象が相互に緊密に関係している以上、危機はある特定の原因によるものとして考えることができなくなっている。悪の存在が曖昧になれば、その対極にあるべき善のイメージも曖昧になる。

妄想世界から、絶対的な悪である「悪い陛下」が消えた時、絶対的な善である「よい陛下」も同時に消えていく。善と悪との対立が不明確なものとなった時、混乱はより深まっていくのかもしれない。中井久夫の言うところによれば、最近では妄想の内容が、盗聴器、探知機、宇宙人といった科学的なものから、魔法使いとかテレパ

シーといった一時代前の妄想に戻っているという。妄想は、人類史の深層へと向かっているかのようだ。

情報化社会に生きる私たちは、すでに述べたように、何か目に見えない力によって自分が操作されているのではないかという疑いを常に持ち続けている。自分の欲望も、不幸も、そして、幸福も、それが本来に自分のものであるかわからない。私たちは、至る所から聞こえてくる無数の声の中から、必死になって自分の声を聞き分けようとすると、どれが自分の声なのか確信を持つことができない。

自分のしゃべっていることばも、それが自分のことばなのか疑わしい。誰かにしゃべらされているのではないかという疑いが晴れてくれない。情報化社会において、世界は情報の粒子となって自分の中に流れ込んでくる。流れ込んできた情報を整理して、形を与えていかない限り、自己の内側で無数の声が反響し、内面の世界はかき乱されていく。そこには、不幸として語ることでできない不幸や、悪として示すことでできない悪が形にならないまま停滞している。

閉じた回路とシエルター

情報化社会の状況について概観してきた私たちの目には、金星人であるテレバートさまと交信する「光命之会」の人たちの用いる道具立ては、新しいようでいて古く見える。彼らは、空に現われた光体という微かなるしから多大な意味を読み取るうとする。月にまでその足跡を残した現代人の想像力は、金星人の実在を信じなくもない。金星人は私たちの生きる世界の外側に位置し、人間に特別なメッセージを送ってくれる。そこでどんなメッセージがやりとりされているかは不明だが、問題はメッセージの内容ではなく、交信が行われているという事実そのものにある。

彼らだけが金星人と交信できるということで、自分たちを選ばれた者として考える。しかし、この道具立ては、いつまで有効に機能するのだろうか。ただメッセージを受け取っていることに、いつまで満足してられるだろうか。宗教は「来たるべき時」を約束し、その時が刻一刻と近づきつつあることを信者たちに納得させようとする。

る。そして、問題はその時の到来をいつまで熱い思いで待てるかにある。

この世界の外側に、私たちにメッセージを送ってくれる対象を見出すことは、伝統的な宗教の方法である。「光命之会」の場合には、その対象が金星人という目新しいものであるだけで、構造自体は従来の宗教の形態と変わらない。そして、金星人との間に成立したコミュニケーションの回路は、そこに閉じた世界を作りだす。彼らの信仰は、存在するかもしれない金星人に根拠を置いている。しかし、金星人は常に隠れだま、光体という微かなるしとしてしか現われない。金星人の与えてくれる情報が、彼らの生活をドラスティックに変化させるとも思えない。それは、情報化社会に響く無数の声の中に溶け込んでいる。

情報化社会の中では、個人が情報として拡散されてしまふことを防ぐシエルターが必要なのかもしれない。シエルターの外側の情報化社会では、情報の嵐が吹き荒れて、そこに巻き込まれれば果てない消費への欲望がかきたてられる。私たちは諦めることを許されず、可能性が

無限であるかのように思い込まれる。どこへでも行ける、どんなものでも手に入れることができるという囁きが耳元で聞こえる。どんな無理なことでもひょっとしたら何かの偶然によって実現するかもしれない。その証拠に、広い世界には一夜にして億万長者になった人間がいるではないか。テレビの画面は無言のうちに、そう誘惑する。情報化社会は、私たちに無限の選択肢を与えられているような錯覚を与える。

荒野でイエス・キリストの前に現われた悪魔は、全世界を与えようといってイエスを誘惑したという。イエスがすべての誘惑を退けたために、悪魔は一旦は身を引いたが、完全に消滅してしまつたわけではない。限らない欲望を抱く人間の耳元での囁きは、あるいはこの悪魔の声なのかもしれない。シエルターの中で、その囁きに耳を閉ざすが、宗教に残された最後の手立てのようにも思われる。

共同体というシエルター

情報化社会におけるシエルターになりうるものの一つ

に共同体がある。外界から隔絶された共同体を作ることによって、情報の流入と流出をコントロールし、共同体のメンバーを情報の嵐から守ることが可能になる。

山岸会は、わが国における最大規模の共同体であり、二千八近い人間が全国三十数箇所の共同体で生活している。彼らは、自分たちの理想とする「ヤマギシズム社会」の建設を目指しているというが、彼らの共同体は情報を遮断するシエルターとしても機能している。

まず、この共同体へのイニシエーションの過程である「ヤマギシズム特別講習研鑽会」に参加する人間は、一週間にわたって外界から隔離され、情報を遮断された状態に置かれる。これは、共同体の生活においても共通し、財産をすべて持って共同体に加わった人間たちは、自分たちの生活の有様にもっぱら関心を寄せ、外の社会で起こっている出来事に対してあまり興味を持たなくなる。

彼らの共同体は無所有をかけた、給与もなければ、個人の財産や貯蓄も一切ない。共同体の生活の中では、金はまったく必要とされない。食事は食堂でとることができ、日常の暮しに必要なものは、共同体の中にある供給

所で手に入る。もしそこにもなければ、要望を出して買ってもらえばいい。だからといって、彼らは労働を怠けたりはしない。休日もなしに、朝から晩まで熱心に働き、しかも「研鑽会」という会合が頻繁に開かれ、個人の自由時間はほとんど存在しない。

彼らの意識は内側に向いている。そして、現在を生きることが最も重視されている。月ごとや日ごとのテーマがあり、職場ごとにテーマが与えられる。「暑い時に、思い切り暑いことをやってみよう」といったテーマにしたがって、その日の労働が営まれる。彼らが労働の中でそのテーマをどう感じたかが研鑽会の話し合いのテーマとなっていく。彼らには、テーマによって枠づけられた「現在」という時しかない。未来を考えるのは、共同体の中の特定の人間に限られている。

山岸会の共同体の中で生活する限り、情報によって惑わされることは少ない。外側から流入する情報にふれる機会も限定され、しかも金を持たないことによって消費という回路が閉ざされている。情報化社会全体を一挙に転換させることが不可能である以上、そういった小さな

「ヤマギシ」と大書されたトラックで運ばれてくる食品の向こう側には、「金のいらぬ仲良い楽しい村」と呼ばれる山岸会の不可思議な共同体が見え隠れしている。

山岸会の共同体は特別な場所に見える。消費者は、その生活に不可解さを感じながらも、幾分かの羨望の念を禁じえない。

山岸会の共同体は、現実からの逃避ではない。それはまさに消費主義社会の只中であって、消費者の消費への欲望を喚起している。彼らの生活の全貌が明らかにされないために、逆に好奇心がかきたてられる。山岸会は、内側に向かって情報の流れをコントロールすると同時に、外側に向かって巧みに情報を操作している。そのために、消費者にとって、山岸会の共同体の生活も、そこで生活する人間も、特別なものに見えてくる。山岸会の人間はやはり「選ばれた民」として、私たちに對してくる。これもまた宗教の伝統的な道具立てだが、選民思想はいまだに一種の魅力を持っているようだ。

共同体というシエルターの中にはいつでも入ることができる。少なくとも山岸会ではその門戸を開き、新しい

シエルターを作ることによって、情報の嵐から守られた生活を確保していくことにも意味があるかもしれない。そこには、情報に対する禁欲的な体制がある。

しかし、私たちは、山岸会の生活を複雑な思いで見つめざるをえない。情報に対する禁欲の姿勢は、確かに私たちにとって一つの道を示しているようにも見える。自分たちの生活こそが本当の生活だという彼らの主張も、それなりに筋の通ったものに感じられる。しかし、彼らの生活は、情報化社会の上に成り立っている。彼らは、自分たちの共同体において生産された卵や肉を始めとする各種の生産物を消費者に販売することによって生活を成り立たせている。山岸会自体は、自分たちの共同体の生産物を「自然食品」として考えてはいないが、消費者は安全で健康的な食品として受け取っている。山岸会の急成長の背景には、自然食品を求める消費者の声がある。

山岸会もまた消費を喚起する装置として機能している。彼らは自分たちの生産する卵には自分たちの魂がこもっているとして、それを「魂子」と呼ぶ。このコピーは、安全で自然な食品を嗜好する消費者の心をくすぐる。

メンバーを募っている。しかし、私たちが大挙して共同体のシエルターの中に入っていくようにも思えない。それは選民思想にともなう危うさのせいだろうか。彼らは自分たちの前提を信じていない人間を劣ったもの、遅れたものとみなしているところがある。

しかし、伝統的な宗教の道具立てを否定し、共同体というシエルターを望まないとしたら、他にどういった選択肢が残されているのだろうか。残念ながら、今の私たちにはそれが見えない。だが、その一方では、一九九〇年代を迎え、私たちは時代の変化の予兆を感じている。何かが終わろうとしているという感じがある。何が終り、そこから何が生まれてくるかを知るためには、二十一世紀へのこれからの十年を「終末」として生きなければならぬかもしれない。終末論は、現在の世の終わりを説くとともに、それにかわる新しい世界の到来を約束する。終末論がリアリティーを持つためには、終わりを告げようとしているこの時代がどういった時代であり、それがなぜ終わらねばならないかの必然性を明らかにする必要がある。

私たちは、そういった試みを「人類史」と呼び、人類が地球という自然環境の中でこういった文明を築き上げ、それが自然に対してどういった影響を与えてきたかを振り返ることの重要性を説いた拙著『私というメディア』(パーソナルメディア刊を参照)。これまで日本の思想界では、そういった人類史的な観点に立つての研究は試みられてこなかったように思う。

それは宗教と思想との関わりについてもあてはまる。宗教は、本来、超越的な存在との関わりを通して、人間の生の根拠を示すことをその役割としている。西欧近代思想が確立される過程で、宗教の問題が常に重視されてきたのも、キリスト教的な枠組みによって個人の世界観が強く規定されていることが自覚されてきたからだ。その格闘の中でしか、近代社会を支える新たな世界観を構築することはできなかった。

私たちの生きる日本社会では、その格闘の過程を経ないまま、西欧社会で作られた近代思想や世界観・科学観を移入し、それを加工して利用してきた。宗教の分野についても、宗教が思想として論じられることは少なかつ

た。教義に関心が向けられない中で儀礼が発達し、それが伝統的に受け継がれてきている。しかし、人間をどう考えるか、社会をどう考えるかについては、それほど関心が向けられているとはいえない。

キリスト教の経てきた宗教改革の経験を持たないまま、宗教的行為が習慣として、習俗として無批判に繰り返されている。おそらく私たちは、自分たちの行っている宗教的行為の意味をあいまいにしか語ることができないであろう。

情報化社会は、そういった日本人の宗教を外側の世界に向かつて公開することになる。日本人が日本人の中だけで営んできた宗教的実践が、世界の人々の目にさらされようとしている。例えば、私たちは、正月の初詣を社会的な習慣として考え、ことさら宗教と結びつけて考えない。少なくとも、信仰と結びつけて考えられてはいない。

しかし、外国人は日本人が初詣の際に大挙して神社仏閣を訪れることを、無気味に感じているところがある。それを恐ろしいと言う人さえある。それは、国際社会に

おける日本人のイメージと重なり、集団の力によって世界を席卷する日本人への恐怖に発展する。

私たちは今、自分たちの行いに關して無自覚ではいられない。私たちが、社会生活の前提とし、常識と見なしていることについても、それを論理的に説明する必要があるかもしれない。私たち日本人は宗教や信仰についてどう考えているのか。それが、私たちの人間観・社会観とどう結びつくのかを語っていかなければならない。それこそが、情報化社会における宗教改革へと展開していくことであろう。

(しまだ ひろみ・放送教育開発センター助教授)